

酒田市立資料館 第194回企画展「絵はがきに写る近代の酒田」

絵はがきの歴史

絵はがきの誕生

きっかけは私製はがき認可、日露戦争でブームに

明治4年(1871)に郵便事業が始まった日本では、同6年(1873)に官製の郵便はがきが発行された。絵はがきの始まりは、同33年(1900)に私製はがきの使用が認可されたことによる。

認可後すぐに、少年雑誌「今世少年」の付録として作られた「二少年シャボン玉を吹く図」が、私製絵はがき第1号といわれている。2年後の明治35年(1902)には、万国郵便連合加盟25周年を記念して、初の官製絵はがきが発行された。

明治37年(1904)に日露戦争が始まると、軍事郵便(※)が発行され、さらに逓信省が凱旋記念などの絵はがきを発売した。これを契機に、日本中に絵はがきブームが起こり、絵はがき販売業者も急増していく。

その後も印刷技術、写真技術の進歩に伴い、風景写真や美しい女性の写真、油彩画・水彩画・日本画などの複写、版画など、幅広いジャンルの絵はがきが大量に作られ、大衆文化へと成長していった。

※軍事郵便…戦地から内地に出すはがきは料金が免除された。



▲酒田郵便局(左の建物)が写る、明治40年～大正7年頃の絵はがき

日本の郵便事業と絵はがきの始まり

年	主な出来事
明治 4年 (1871)	郵便事業創業(東京と京都・大阪間に新式郵便の取り扱いを開始)
5年 (1872)	郵便制度を全国的に実施 酒田では、7月に酒田郵便取扱所が設置される
6年 (1873)	郵便はがき(官製)の発行開始
10年 (1880)	万国郵便連合に加盟
18年 (1885)	逓信省創設 往復はがきの発行開始
33年 (1900)	私製はがきの使用を認可(これにより、さまざまな絵はがきが作られるようになる)
35年 (1902)	初めての官製絵はがき(万国郵便連合加盟25周年記念)を発行
37年 (1904)	軍事郵便はがき発行(日露戦争時の戦地と内地の通信用) 日露戦争に取材した絵はがきが発行され、絵はがきブーム起こる



ニューメディアでもあった絵はがき

絵はがきには、視覚的な美しさを楽しむだけでなく、皇室関連行事や博覧会など、大きな出来事の模様をいち早く伝えるニューメディアとしての役割も果たしていた。

その対象は災害や事故にも及んだ。大正12年(1923)、関東大震災直後には、被災状況を伝える絵はがきが売り出されたが、中には死体が積み重なっているものもあり、販売を差し止められた。

酒田は、明治27年(1894)に発生した庄内地震で壊滅的な被害を受け、被災状況を撮影した写真が残っている。もし、地震前に私製はがきが認可されていたら、庄内地震の絵はがきが作られていたかもしれない。

右の絵はがきは、明治42年(1909)4月19日、酒田港に日本海軍の水雷艇が入港した時に、酒田の書店・白善書房が発行した絵はがき(上)と、大正3年(1914)の陸羽横断鉄道酒田線が開通を記念して作られた絵はがき(下)。



酒田の写真館の創成期

先駆けは明治13年頃に開業した白崎民治

絵はがきは、印刷技術の向上に支えられて発展したが、写真技術の向上も大きな役割を果たした。庄内で最初の写真館は、明治4年(1871)に鶴岡の元庄内藩士・加藤正寛が開業した「寛明堂」だった。

酒田では、明治18年(1885)に開業した「徳翠軒」が最初といわれていたが、白崎民治という人物が、明治13年(1880)頃に開業していたことが新たに分かっている。

明治期に開業した酒田の写真館

- 白崎民治……明治13年(1880)頃、開業。酒田で最も早い写真館のひとつと思われる。
- 松山堂(菊池)……今町にあった。最も古い写真館のひとつだったかもしれないが、詳細は不明。明治27年(1894)の庄内地震で廃業したと思われる。
- 徳翠軒……明治18年(1885)、家坂徳三郎が出町に開業。
- 池田写真館……明治18年(1885)頃、池田亀太郎が船場町に開業。池田は酒田における油絵の先駆者としても知られ、肖像画や鮭の絵を数多く描いた。
- 玉影堂……明治20年代末・後半(?)、女性写真家・池田まさか下台町に開業。その後、富山県出身の写真家・若林安松と結婚したといわれている。後に若林写真館となる。
- 美影堂……明治30年代、秋田町に開業。
- 華影軒……明治30年代、新町に開業。

白崎民治について

白崎民治は、酒田で最初に写真館を開業した人たちの中の一人と思われる。安政4年(1857)に生まれ、生家は呉服商だったらしい。

明治9年(1876)に旧亀田藩(矢島藩?)家老・小助川三次から写真技術を学び、明治11年(1878)頃に上京して、銀座に写真館を開いていた二見朝隅に師事。明治13年(1880)頃、酒田に写真館を開いたらしい。そして明治21年(1888)頃、仙台に移住し、本格的に写真師として活躍するチャンスをつかんだと思われる。

才能に恵まれ、その後も熱心に写真技術を学んだ白崎は、酒田の佐藤兼吉、鶴岡の五十嵐与七などの写真師を育てたという。明治23年(1890)、同28年(1895)には内国勸業博覧会に出品している。

酒田の絵はがきのルーツ

酒田の名所絵はがきの原点

さかたみやげ 木版「酒田十景」

幕末の文久年間(1861~1864)、「さかたみやげ」として、酒田の名所を題材にした10枚組の木版「酒田十景」が売り出された。本町一丁目の五十嵐仁左衛門が版元となり、町絵師の五十嵐雲嶺に描かせた。

各地の景勝地を写した絵はがきは、観光土産として人気を集めるが、写真技術が入る以前の日本では、錦絵(木版の多色刷り版画)が、その役目を果たしていた。代表的なものに「近江八景」がある。酒田十景のうち八景は、この近江八景に倣って作られたという。

現存する版画は少ないが、大正10年(1921)に酒田町史編纂掛によって、墨版だけの後刷りが再版された。この版木10枚は本間美術館に所蔵され、昭和62年(1987)、初刷りを再現した木版画が200組限定で製作された。

酒田十景には、本町通り、新井田橋、日和山、山王社(下日枝神社)、高野浜などが描かれており、明治・大正期から戦後まで、同じ場所を題材にした名所絵はがきが、数多く作られてきた。現在、再現した木版画の絵はがきも販売されている。

大正初めに作られた油彩風景画の絵はがき

大正時代の初め、油彩の風景画を使った絵はがきが、酒田で作られている。「大家洋画原色版 酒田風景絵葉書」という4枚一組の絵はがきである。

佐藤三郎著『酒田よもやま話』によれば、酒田の素封家であった伊藤家が、4人の洋画家を招いて風景画を描かせ、絵はがきを作って販売した。この時作られたのは、中川八郎作「日和山落暉(らっき)」、河合新蔵作「山王森午影」、石川寅治作「宮之浦帰舟」、吉田博作「中瀬渡頭」の4種類だった。

その後、原画はばらばらに売られたが、日和山落暉の原画は酒田市に寄贈され、現在は酒田市美術館に収蔵されている。



▲中川八郎作「日和山落暉」

絵はがきはどこで発行していた？

古い絵はがきの中には、「〇〇発行」「〇〇製」などの記載があり、発行所が特定できるものがある。

今回展示している酒田の絵はがきには、白善書房、青山堂、中村書店などの店名が入ったものがあり、かつては市内の書店で盛んに絵はがきを発行していたことが分かる。

ほかに、日の出商店、三浦屋小間物店など商店で発行した絵はがき、酒田ホテル(渡辺旅館)、中川屋ホテルといった宿泊施設が、宿泊客向けに販売していたと思われる観光絵はがきも残っている。

原版となる写真を豊富に持っていた写真館では作っていないのか？資料館所蔵の絵はがきからは、写真館の名前が入った絵はがきは見つけれなかったが、「若林絵ハガキ部発行」と記載された絵はがきがあった。若林写真館(玉影堂)に、絵はがきを作る部門があったのかもしれない。



▲三浦屋発行と書かれた「大浜海岸」の絵はがき

新井田川と新井田橋の絵はがき

酒田と新井田川

かつて新井田川は、酒田近辺に暮らす人々の生活に密着し、重要な役割を果たしていた。

藩政時代には米を運ぶ輸送路として利用された。旧市内に当たる酒田町と、亀ヶ崎城(現在の酒田東高校)、鶺鴒渡川原村(現在の亀ヶ崎地区)を結んでいた新井田橋は、新井田川にかかるただ一本の橋として、交通の要になっていた。木の橋から、「眼鏡橋」と親しまれた石橋に架け替えられた明治以降も、道路交通網が整備されるまでの長い間、それは変わらなかった。

また、現在では想像しにくいだが、新井田川周辺が市街地化される以前は、川沿いから鳥海山をすそ野まで見渡すことができた。その頃は水が澄み、さまざまな川魚が取れ、子どもたちにとっても格好の釣り場だった。酒田の絵はがきには、そんなのどかな新井田川の情景を写したものも多い。

戦後も昭和40年代頃までは、釣りやボート遊びが楽しめる憩いの場になっていたが、その後、周辺の宅地化や護岸工事が進み、当時の面影は消えてしまった。しかし現在でも、地域住民が中心となった「心のふるさと新井田川の会」が、川辺の美化活動に取り組むなど、新井田川を大切する気持ちは変わっていない。



▲木橋だった頃の新井田橋

眼鏡橋と呼ばれて親しまれた新井田橋

江戸末期に作られた木版「酒田十景」に「新井田橋」がある。当時、新井田川に架かっていた橋は、酒田の町と亀ヶ崎城をつなぐ新井田橋だけだった。

木橋だった橋は、明治23年(1890)、県令・三島通庸が招いたドイツ人技師が設計した石造りの橋に架け替えられた。3つのアーチが連なった優美な橋は、酒田の名所のひとつとなり、市民からは「眼鏡橋」と呼ばれて親しまれた。絵はがきにも、新井田橋を写したものが数多く残っている。

しかし、昭和24年(1949)から新井田川の河川改修が始まると、昭和30年(1955)に惜しまれながらも取り壊され、現在のコンクリート製の橋が架けられた。



明治時代に発行された新井田橋の手彩色絵はがき

表面に「酒田港中村青山堂博聞堂発行」と印刷されている。

タイトルは「新井田川(酒田港)」だが、英語表記は「The araitagawa(アライタガワ) in sakatako」になっている。酒田以外の絵はがき製作所に依頼して作られたのだろう。

右の写真は現在の新井田橋周辺の様子。

酒田湊から酒田港へ

発展途上の酒田港が写る絵はがき

古くから最上川の河口港として発達した酒田港。暴れ川だった最上川は、洪水によりたびたび流路を変え、上流から流れてきた土砂で港が埋まるなどの被害に見舞われた。

明治18年(1885)、内務省直営による最上川改修工事が始まり、同36年に竣工した。さらに県が引き継いで工事を行ったことで、ようやく水深が定まり、8,000~9,000トンの汽船が入れるようになった。しかし、水深は次第に浅くなり大型船が入れなくなった。

当時の酒田港は、鉄道と馬車による陸運の発展、明治27年(1894)に起きた庄内地震の影響もあり、衰退する一方だった。こうした状況の中、酒田町民から港湾整備の促進を求める声上がり、港湾復興運動が始まった。

大正時代になると、内務省は、最上川と酒田港を背割堤で分離する画期的な河海分離工事に着工し、昭和7年(1932)に完成する。この工事では、船場町沿岸を埋め立てて岸壁も整備し、近代港湾としての第一歩を踏み出した。

その後、後背地には鉄興社を核とする大浜工場地帯が形成され、戦後の高度経済成長とともに酒田港も発展。昭和45年(1970)からは酒田北港の整備が始まり、現在は山形県唯一の重要港湾として、環日本海圏の物流を支えている。

かつて北前船の帆が林立していた酒田湊の姿を、現在の酒田港から想像することは難しいが、古い絵はがきには、発展途上の酒田港の様子や、市民の憩いの場であった、のどかな海岸の風景が写っている。



▲絵はがき「酒田大浜海水浴場(其一)海涼軒」

戦前の絵はがき。「海涼軒発行」とあるので、海の家で絵はがきを販売していたのだろう。



▲絵はがき「大浜鮭網の光景」

戦前の絵はがき。昭和30年頃まで、大浜海岸は鮭漁でにぎわっていた。



▲絵はがき「酒田港(西埠頭)」

中村書店発行。戦後に作られた絵はがき。3,000トン岸壁の後ろに鉄興社が見える。



▲絵はがき「最上川より鳥海山遠望」

大正7年(1918)以降に作られた絵はがき。最上川河口の中州から日和山、鳥海山を写したものだだろう。



絵はがき「港口」(青山堂発行)

大正時代前半、日和山から見た酒田港口と思われる。この絵はがきから、どんなことが分かるだろう。

◆導水堤(石堤)が造られ、船溜まりがあった

明治37年(1804)に始まった工事で①の石堤が造られ、②の船溜まりができた。当時の地図を見ると、この石堤を基に現在の酒田港が整備されていることが分かる。

◆船溜まりに三角橋がかけられていた

石堤と岸を結び丸太で組んだ三角橋(③)が架けられ、良い釣り場となっていた。

◆日和山の下に専売局(専売公社)があった

大正元年(1912)4月、船場町に三春町専売官吏派出所(酒田煙草専売局出張所)が置かれた。洋風でモダンな事務所(④)が目をつけた。

◆河口に中州があった

当時、河口には下瀬という中州があり、宮野浦への渡船の中継地点になっていた。位置から推測すると⑤は下瀬と思われる。

大正時代に始まった最上川と酒田港の河海分離工事では、この中州を利用して背割堤が造られた。

参考『目で見える酒田市』『酒田市史年表(改訂版)』

『ふるさとの思い出写真集 明治・大正・昭和 酒田』(佐藤三郎著)

『酒田港回想』(中山岩男著)

日和山公園今昔

たくさんの絵はがきになった酒田随一の名所・日和山公園

今も昔も市民に親しまれ、多くの観光客が訪れる日和山公園は、港町酒田を象徴する名所のひとつだ。

その昔、船乗りが天候を見た丘は「日和山」と呼ばれた。酒田も含め、今でも70カ所ほど名前が残っているという。酒田の日和山は、河村瑞賢が西回り航路を整備した寛文12年(1672)より前からあったと思われる。

文化10年(1813)に現在の展望台の所に盛り土をして常夜灯が建てられてから、特に日和山、あるいはト晴台と呼ばれて住民にも親しまれるようになった。

維新後の明治6年(1873)、日和山は太政官布告により公園用地になり、同14年(1881)の明治天皇巡幸の際、広大な工事が行われた。「日和山公園」と命名されたのは同23年(1890)のことである。大正4年(1915)には、大正天皇即位記念として大改造され、町営の公園になる。観光客の人気も高かったのだろう。この頃に作られた日和山の絵はがきが数多く残っている。

大正15年(1926)、全国的な野球ブームにより、公園内に野球のできる広場(グラウンド)が造られるが、広場は祭りの見世物小屋やサーカスなどの催しにも利用された。終戦後の昭和23年(1948)には都市公園となり、その後、児童公園や噴水などが整備された。

現在の公園は、市制施行50周年記念事業として、昭和60年(1985)に完了した整備で造られたものだが、大正時代の絵はがきと見比べると、当時の姿が残っている場所が多いことに驚かされる。



▲小幡前が写る大正4年の大改造後の絵はがき(左)と、現在の同じ場所の様子



▲大正4年の大改造後の朝日山が写る絵はがき(左)と、現在の同じ場所の様子

朝日山の絵はがき

日和山公園の絵はがきには、「朝日山」とタイトルがついたものがいくつも残っている。写真のモチーフとしては絵になる場所であり、何種類も作られたのだろう。

朝日山とは、公園に入ってすぐの、芝生広場を見下ろす高台のことである。現在、文化10年(1813)に造られた常夜灯が置かれているが、絵はがきを見ると、常夜灯があるものと、ないものがある。朝日山は、明治14年(1881)の明治天皇巡幸の際に行われた工事によって築かれ、名前もこの時に付けられた。もともとはゴミ捨て場でできた山だったため、地元では「あっけつ山(※)」とも呼ばれていた。

常夜灯は、最初は現在の展望台にあったが、小さくて灯台の役割を果たさなかつたので、別の大きな常夜灯に替えられ、朝日山に移されたらしい。

大正4年(1915)の大改造で朝日山は崩され、常夜灯は入口に移された。つまり、朝日山に常夜灯があるのは大改造前、ないのは大改造後の絵はがきということになる。

常夜灯は、昭和60年(1985)の改造時に、また朝日山だった高台に戻され現在に至っている。

※あっけつ…酒田弁でゴミ、チリのこと



▲大正4年の大改造前の朝日山が写る絵はがき

日和山大改造の設計を手掛けた農学博士・星野勇三

大正4年(1915)の日和山公園大改造の設計を手掛けたのは、田川郡手向(現在の鶴岡市羽黒町)出身の農学博士、星野勇三だった。

星野は明治8年(1875)生まれ。北海道帝国大学(現在の北海道大学)教授などを務め、メンデルの法則を初めて日本に紹介した園芸育種学の権威として知られる。札幌大通り公園の設計も担当した。紫綬褒章を受章し、初めての羽黒町名誉町民に選ばれている。昭和39年(1964)に89歳で死去した。

市内名所の絵はがき

本間光丘が植林した松林を通る長坂

松林の中を延びる道を人々が行き交う、のどかな「長坂」の風景は、たくさんの絵はがきに残されている。松の緑が美しいこの道は、酒田の名所のひとつだった。現在は光ヶ丘陸上競技場沿いを通る国道112号線になっている。

この光ヶ丘一帯の松林は、宝暦8年(1758)から本間光丘が植林した砂防林である。酒田の中心市街地から高砂へと続くこの一本道は、万延元年(1860)には「能登興屋道長坂」と呼ばれていた。後に、この地域は「長坂西」「長坂東」と称された。

地名が光ヶ丘になったのは大正8年(1919)。光丘の功績を長く記念して残そうと、町議会で決められた。

明治時代の長坂では、グラウンド代わりに学校の運動会が開かれていた。大浜工場地帯ができるまで、大浜海岸へと続いていた松林は、行楽地として市民に親しまれていた。



▲明治～大正頃の長坂を写した絵はがき(上)と長坂でのご狩りを楽しむ人々(下)

絵はがき「長坂鶴亀橋」

酒田駅が開業した翌年の大正4年(1915)4月、酒田港に最上川駅(後の酒田港駅)ができ、臨港線が開通した。この時、現在の親子スポーツ会館南側の丘を切り崩して線路を通した。

この丘には、酒田市内から長坂に続く道が通っていたため、跨線橋が架けられた。その橋を写した、大正8年(1919)～昭和8年(1933)頃の絵はがきである。



佐藤三郎著『酒田よもやま話』下巻によると、東海道線の不要になった鉄橋を払い下げてもらって架橋した。切り崩してできた斜面は、今も当時のままの形を残している。

絵はがきのタイトルは「鶴亀橋」だが、現在の橋名は「光ヶ丘橋」になっている。現在、日本海病院そばの小牧川に架かる橋に「新鶴亀橋」という橋があるが、関連があるのかは分からない。

明治時代から名所だった山居倉庫

山居倉庫は、今から122年前の明治26年(1893)に創設した株式会社酒田米穀取引所の付属倉庫として建設され、同30年(1897)までに14棟が造られた。

整然と並ぶ倉庫と、米俵を積んだひらた船が浮かぶ新井田川に、山居橋が架かる風景は、絵はがきによく登場している。

絵はがきに写っている山居橋は、昭和34年(1959)に老朽化などのために解体された。現在の山居橋は平成5年に新たに設置された。



▲明治～大正頃の山居倉庫の絵はがき

現在も現役の倉庫として使われ、酒田を代表する観光スポットとして県内外から、大勢の観光客が訪れている。

羽前・羽後を結ぶ幹線道路として造られた両羽橋

酒田と鶴岡とを結ぶ幹線道路の役割を果たしてきた両羽橋は、明治27年(1878)、東田川郡新堀村落野目と飽海郡大宮村の間に造られた。

それまで最上川兩岸の行き来には渡し船を使うしかなかったが、橋ができたことで、かつての羽前国(田川郡)と羽後国(飽海郡)が陸続きとなったことから、両羽橋と名付けられた。

初代・両羽橋は木造。高い方杖橋脚が描く幾何学模様は壮観で、絵はがきにも名所として登場した。

しかし、老朽化と交通量の増加によって、昭和11年(1936)に2代目の鉄橋に架け替えられた。長さ713.9m。当時日本で第6位、東北一の長さを誇った。

昭和40年代に入ると、交通量の増大と車両の大型化交通量が激増したことや、橋の南端で国道7号と47号が交わることから、交通渋滞がひどくなる。このため、昭和47年(1972)から大規模な整備が始まり、平成3年、4車線ある現在の3代目両羽橋が完成した。



▲初代両羽橋の絵はがき(上)と、2代目両羽橋の絵はがき